

10 特集 佐原向地 PARTⅢ 横利根川

24,70 特集Ⅱ フォーラム侠 最強の秘密を解き明かせ!!

マルキュークラブ対抗選手権四連覇達成緊急対談。 田中雅司 糸井日出男 岡野正基 & 岡田 清



●今月の表紙●

angler: 岡田 清
field: 野田幸手園

photo & layout: 本誌・田中里史

COLOR (カラー)

- FIELD PHOTO REPORT**
- 6 横利根川(千葉・茨城県)
 - 8 北部手賀沼(千葉県)
 - 19 名手・石井旭舟がいく、へら鮒出合い旅… **へらぶな浪漫街道**
《第十三回》千葉県・三島湖
 - 27 **スーパーアングラー小池忠教のエサ合わせ大全**
《Vol.13》浅草へら鮒会の試釣&最終例会 in 野田幸手園
 - 33 **新連載** 生井澤 聡&山中いつ子の**佐原水郷の四季**
《其の1》放流後の横利根川の釣り
 - 39 棚網 久の**対決mode 1, 2, 3!**
《Battle.32》スーパーバトルⅡ in 将監
久保芳文、小野淳一、寺崎智祥、古川 実、宮田将弘、都祭義晃、鳥内正道
 - 46,146 **新連載** 原始釣人・稲毛利夫&賞果釣人・モロちゃんの純野釣り探求記!
アタリをちょーだい!!
《Vol.1》亀入沼/笠沼/鳥井沼/御在家沼/蓮沼(埼玉県滑川町)
 - 118 **新連載** **好きです! へら鮒釣り!**
《今月の釣り人》東水倶楽部 染谷永心くん
 - 120 **竹とともに生きる。**
《第5回》「一文字」作者 播島光治
 - 125 杉山達也の**SPLASH BEAT Ⅱ**
《Vol.12》粘る! 谷和原大沼月例賞金大会!!
 - 130 **熱血釣り女・吉川ひとみ**がいく! **「へらってヤバイわっ!!」**
《第19回》罰ゲーム!? 野釣りで1枚獲ってこい! 印旛中央水路
 - 134 田辺哲男の**「それってどーゆーことよ」**
《Vol.13》杉山達也の「スーパーアングリッシュセット」第一弾
 - 138 列島縦断 **旅するカメラ**
《群馬県PARTⅡの①》月夜野町付近 見晴荘上の池ほか
 - 141 **西日本川釣り紀行 北川穂積**
《第13回》加古川(兵庫県)
 - 144 **頑固一徹! 自分の釣りを貫き通す男**
《今月の釣り人》71番にこだわる男 佐竹 栄さん
 - 177 岡田 清 **Deep Side Angle**
【G杯争奪全日本へらブナ釣り選手権】
 - 182 **Neoへら・インビテーションル**
【最終戦 神流湖】
 - 190 **FIELD PHOTO REPORT**
印旛新川(千葉県)&道仙田(茨城県)
 - 192 **フィッシングレディ**
《今月のレディ》黒田良美さん 富里乃堰(千葉県富里市)

MONOCHROME (モノクロ)

- 50 **新連載** **今月の要チェックフィールド** 編集部
- ★エリアレポート
 - 52 大石の新堀(佐賀県) 河口正伸
 - 54 和気のと池(石川県) 山本一朗
 - 55 当麻池(奈良県) 前田誠志
 - 56 筏川寄せ場(愛知県) 後藤 誠
- 58 **あらいしのぶの始めてみようよ、へら鮒釣り**
《第9回》へら鮒釣りのハリって、どんなの♡②
- 62 **新連載** トーナメント-小林恭之が挑む! **竿頭までぶっ飛ばせ!!**
《第1回》谷和原大沼オープン記念釣り大会
- 66 **NHCスピリット**
《Vol.4》静野圭一 in 隼人大池
- 75 **江成公隆のトーナメント-、復活への道。**
《Vol.19》~ [釣り両ダンゴ] 復活への道! ~ 伊藤洋一の常識 復習
- 82 **新連載** **そんなモジリにダマされて… 天野正由**
《その1》亀山湖・夢の20枚!? (亀山湖~相模川)
- 88 **水辺のプラネタリウム 吉本亜土**
《今月の星空》「天竜下り」
- 93 **元気が出るへら鮒 西田高明**
《第13回》「MAC紀ノ川に釣る」の巻
- 98 **最狂へら戦士養成所“鮒の穴” 高橋謙司**
《第十二話》【道場破り現る! ニセベッカムを撃破せよ!!】
- 102 **野田幸手園新聞**
- 104 **ワクワク管理釣り場情報**
- 108 **小売店情報**
- 149 **新連載** 竹竿&合成竿で未開の釣り場を楽しむ! **オデコバンザイ!?**
《その1》備前川(茨城県土浦市)
- 157 **ダン・第9回クラブ対抗ペアへら鮒釣り大会**
- 159 **かわせみ・竹竿倶楽部「水尻」発足式**
- ★へら鮒BOX
 - 161 里ちゃんの新米編集長雑誌
 - 162 情報ステーション
 - 164 ボイス
 - 170 新人モロちゃん奮闘記
 - 171 プレゼント発表
 - 172 釣果予想クイズ
 - 175 広告索引
 - 176 編集後記

STAFF

●Producer
根本良一

●Editor in chief
田中里史

●Editor
大場勝良
諸富一秋
根本百合子
伊藤小百合

●Planner
〈オフィス・えび〉
藤原 肇

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆の トーナメント、 復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web運動企画！ (URL) <http://hesar.yokohamatsurumi.net>

「一歩前へ！」

〈Vol.19〉

～【宙釣り両ダンゴ】復活への道！～

伊藤洋一の常識⑤

復習

セット釣り編、底釣り編、宙釣り両ダンゴ編、と進んできた連載も、
今回ではや19回目を迎えた。

月イチ釣行が続いている江成だが、「復活の時」は確実に近づいている。

今年、NHC準人大池会場に参戦した江成は、

見事に総合3位に入る。

未だに「5枚リミット制」への違和感を抱いている方に、

実際に参戦していた里が補足するとすれば、

岡田 清、杉山達也、都祭義晃…といったメンツに交じってのこの成績は、

本当に凄い事なのである。

江成は確実に前進している。

あの熱い「トーナメント魂」は、再び燃え上がろうとしている…。

そして、2004年度は、様々なトーナメントにも参戦していくはずだ。

というわけで、タイトルに「一歩前へ！」を付けさせて頂いた。

さて、今月は、「伊藤洋一の常識」のまとめとして、江成が熟筆した「復習編」だ。

ご承知のとおり、「伊藤洋一の常識」でも、具体的なエサの配合などはほとんど記されていない。

江成が目に向けたのは、「宙釣り両ダンゴ」の根底を流れる理論…。

精進湖、西湖、三島湖、羽生吉沼…と続いていった取材を経て、

江成が得た「宝物」を、みなさんにも思う存分味わって欲しい！

by 里ちん

新年号になってしまいました…。
それなのに僕の記事はまだ「両ダンゴ」。この号が発売されるのは年内ですから、もしかすると場所によってはダンゴで釣れる釣り場もあるかもしれません。そうはいっても季節感のギャップは否めませんので、この場を借りてお詫びしておきたいと思えます。

実は何が何でも12月号で完結させようと思っていたのですが、追加取材で僕が感じた事をどうしても書いておきたく、今月まで延びてしまったという次第です。

なお、新年号より記事のタイトルが若干変更になりました(笑)。編集長のコメントの通りです。完全復活ではなくて、一歩前進。編集長のネーミングセンスには脱帽です。

by 江成

江成の 復習ノート。

伊藤洋一氏編は計4回にわたりましたが、里ちゃんの書いた通り、原稿の大半は初回の精進の取材で完成していました。二回目の西湖、三回目の三島湖、四回目の羽生吉沼は、全く記事にならなかった訳ですが、僕個人的には非常なためになった釣行でした。

「頭では分かっているつもりを、どれだけ行動に移せるのか?」

「ウキから与えられるヒントをどれだけ読み取れるか?」

精進湖での取材を基に自ら書いた「伊藤洋一氏の釣り」を、おさらいすべく臨んだ追加取材。「へら鮎社の経費」でお勉強をさせていただいたわけですが、このままではあんまりなので(笑)、「追加取材(?)」で、僕の中の何が変わったのか?を、少し書いておきたいと思います。それが僕個人の「復習」ということです…。



精進湖で一度も触らなかった伊藤氏のエサですが、今年5月の幸手園で一度触っている。何とも言えない気持ちのいいタッチ。絶妙なフワリ感に、「魔法の粉が入っていないみたい」と思った程だった。

どうしてもアタリを出せないでいた西湖の午後、取材二回目にはじめて、僕は伊藤氏のエサを触った。それは紛れもなく、幸手で触ったあのタッチであった。僕は驚いた。管理釣り場と野釣りという違いこそあれ、1mと18尺いっばいという水深の差があったからだ。

「こんなタッチでタナまで持つのか?」という印象の極上のなめらかさ。魔法の粉のおかげでタナまで持っているのは間違いなかった。

軟らかさはもちろん、氏の感覚ではそれほどでもないのかもしれない。しかし18尺いっばいということを考えれば、一般的に言ってるかなり軟らかい部類に入るの間違いはない。精進で、氏のエサよりは明らかに硬いと思われるエサで決まってしまった僕は、「軟らかさ」の意味を深く理解&実感しないまま原稿を書き上げてしまった。(といても、氏の手エックを受けてから活字になっているので、もちろん記事の内容そのものに訂正はありません)

もうひとつ気になった事がある。エサの手直し頻度は、氏自身では「減った」ということだったが、端から見ているとかなりいじり倒しているという印象を受けた。にもかかわらず、粒子が生きていることによるそのフワリとしたボリューム感。「かき混ぜ方が違うのか?」。



その昔、富士山から吐き出された溶岩。その湖畔線は様々な顔を持つ西湖だが、僕にとって西湖と言えば溶岩地帯だ。

釣果だけで振り返った時、浜(深場)も捨て難いのは事実。ロテオのような荒波の中でのイレバクも、日常では決して味わえないスリルと爽快さがある。

乗込み気味の例会の時には、「浜に始まり浜に終わるってか!」と豹変するお調子者の僕だが、初めての西湖で入釣したせいか、やはり溶岩地帯なのだ。

伊藤氏に言わせれば「だいたい水が汚れた」西湖だが、数年ぶりの釣行の僕にとって「尋常ではない透明度」と、僕の唯一の海外旅行先であるサイパンの海を思い出させる「エメラルドグリーン」は待っていてくれた。「西湖はサイコー」の筈だった…。

西湖に比べればはるかに活性の高かった精進は、エサの幅も広がった。硬いエサでも食い頃にしてくれるだけのへらの量があったのだ。その証拠に、受けながらのアタリが小さいことが多かった。ハリスの長さでも、へらの型やズルさでも変わってくる要素だが、ハリスの弛みが大い状態からのアタリだったと判断することができる。つまりそれだけ多くのへらに採まれていた、という解釈である。

二回目の取材の西湖では、そこまでの量のへらはいなかった。伊藤氏の軟らかめのエサをもつてしても、すぐに持ち過ぎになるような状態であった。薄い魚影と低活性、すなわち「激シ」。そこもつてきて「両ダン」…。しかし午前中の僕は、低釣果ながらも西湖の釣りを満喫していた。久しぶりの西湖だからという理由ではなく、伊藤氏の釣果についていっていたからだ。「精進で得たモノは、しっかりと身につけている!」…残念ながら、これは錯覚だった。

薄日の差し始めた午後、僕は自分の力の無さを痛感することになる。ジワリと上向き始めた伊藤氏のペースとは逆に、僕は沈黙してしまう。まともにアタリを出すことすら出来なくなってしまう。「何も分かっていないな…。すでに書き上がった原稿の書き直しも覚悟した。

丸く丁寧なエサ付けと、向い風の中での完璧な落とし込み。加えて「フリースタイル」による究極のノーテンション。伊藤氏が軟らかめのエサを使っている雰囲気は、十二分に伝わってきた。「チクシヨウ!」西湖では最後までエサを聞かないつもりだったのに!。…たまたまエサを投げてもらう。案の定、軟らかいエサだった。しかも前述したあの幸手のタッチ…。腰が抜けそうになった。

その時僕が使っていたエサは硬め。「伊藤氏のエサを勉強しよう」というのに、硬めはないだろう?という声が聞こえてきそうなので書いておくが、当然軟らかいエサは試してみた。でも、僕はダメだった

のだ。

詳しくは後述するが、ヤマならではの風と波の前に、エサを硬くする事へは何の疑問も持たなかった。事実これはセオリーだし、食いが渋いというイメージが、粒子の余分な拡散をためらわせる。僕の固形チックな論法(9月号や昨年の特集参照)でいっても、しっかりとに進むのは間違いないと思

った。

アタリが出せないとは書いたが、実は時々力強いカラツンを出せていた。エサが硬い事による「持ち過ぎのカラツン」なのは明白だったが、僕の固形チックな論法でいけば、これはある程度は仕方ない。必要経費なのだ。

しかし毎回カラツンが出ていてこそその確率の問題なのであって、たまにしかアタらないようであれば望みは薄い。カラツンでしかない釣りになってしまう…。

と、ここで気が付いた。へらの密度が薄い状態でのアタックでも、エサが確実に食い頃になるためには、元からある程度軟らかくなければならぬのだ。「持つか持たないか」。波風で躊躇してしまうが、やはり軟らかめのエサを打つ必要性があった。「持つばアタリ、アタったら乗る」釣りをしなくてはならない状況だったのだ。

しかし、そのエサが作れない…。



「持ち過ぎのカラツンに対しては、エサを軟らかくする」というセオリーはもちろん知っているし、軟らかくなった事による上層からのバラけ過ぎを防ぐために「魔法の粉」なのだとこの時も知っている。ただ軟らかくすればいいというわけではない。…。

当然この日の僕も試してみた。何度か手水を打ってみる。しかし納得いくタッチが得られない…。以前からなのだが、水分を追い出すことで魔法の粉のネバリが一段と強く出してしまうという印象を抱いていた。どんなに熊手で手早く慎重に掻き回そうともそのネバリに引っ張られ、どんどん粒子が潰れてしまふ。新しい魅を追い足そうものならなあ…。そんな印象だった。精進で僕が伊藤氏に質問した

「手直しの回数」は、実はここから来ているのだ。

エサを作り替えずに使い続けようとした場合、戻して新しい餌を追い足す事になるわけだが、僕の感覚では元エサの割合で言ったら3割、いや2割くらいになる程大きく戻さなければ、戻し切れないという印象。つまりそれは、手直しや微調整ではなく、作り替えに等しい。魔法の粉入りのエサは、かなり使い込んだ末に、ブレンドパターンで組み立てていくエサなのではないか？ もしそうならそれは、実はとんでもなく難しい釣りである、と思った。僕にはそこまでの時間はない…。だが待て、伊藤氏は結構いじっているようにも見た。指先のマジックなのか？ しかし、どちらの魔法にせよ、正直な話この時点で伊藤氏の釣りを盗むなど、どだい無理な話だと諦めかけていた。自分で真似出来る、出来ないは置いておくとして、伊藤氏の釣りを読者の皆さんに紹介出来ればそれでいいや…。

帰りにみんで立ち寄った河口湖畔の定食屋。「世界の田辺」イチオシのカツ丼を頼張る。「絶品。里ちゃんはその美味と、スペシャルなメンバに興奮気味。10月号冒頭の里ちゃんのコメントは、僕ではなくて里ちゃん自身の事なのだ。もちろん僕もミハーなので、とつても幸せな時間であったことに間違いはないのだが、その日の釣りを振り返るとシヨソボリしてしまっても同席していた。「原稿の書き直しか？」という現実問題が待ち受けていたからだ。

「このままじゃ帰れねえ」…伊藤氏の釣りは頭では分かったような「気はする」。しかしエサが難しく過ぎるのではないか（へら釣りは難しいのは承知している。それが面白みなのだとも。それにしても…）。

席上、僕は伊藤氏に想いをぶつけた。
江：自分の分量は糊に上げちゃいますけど、「魔法の粉」難し過ぎやしませんか？ 伊藤さんのエサくらい軟らかくしちゃつと、どうやっても伊藤さんみたくフワツとならないんですよ。練らなくなつてペターツとなつちゃうんです。で、魔法の粉が多過ぎるのかと思って減らして作り替えると、今度は全然持たないエサになつちゃつて…。結局粒子を立たせておこうと思ったら、僕の作り方では硬めのエサになつちゃうんですよ、あんまり水分を吸わせたくなないので…。何が違うんですかね？ 慎重に掻き混ぜてるつもりではいるんですが。
伊：うん、江成君の感じたことは正しいよね。水分

を吸い切ると力が100%発揮されちゃうって言うかさ。芯残りが良すぎちゃうから。純粋に「接着剤」として使うなら、「追い足し」という手があるよね。魔法の粉で作っておいで、後からバラバラ振り掛けて混ぜるわけ。まんべんなく振り掛けないとダメだよ、偏っちゃちゃうから。

江：なるほど。でも伊藤さんのはかなり軟らかいじゃないですか。あれで水分吸い切つてないなんて事はないですよな？

伊：うん…こうなつてくると水分を吸いきつたかどうかよりも、魔法の粉のエキス（？）が密に絡むかどうかという話にもなってくるんじゃないかな。早い段階で入れれば入れる程、良く混ぜるといふか行き渡るわけだね、全体に。ちなみに今日なんか最初っからは入れてないわけだけど、ネバリはそんなに強くなかつたよ。

江：（ガビーン！）マジツつか？ 聞いてないッスよ！…いつもそうなんですか？

伊：管理なんかは最初から入れる事もあるけど、野釣りではあんまり最初からは入れないね。なんだ、江成君は最初から魔法の粉と一緒に混ぜてたの？ 気付けてあげればよかったねえ（笑）。

江：笑えないッス…。でも、釣りはホント難しいですね。ほんのちよつとした事なんですけどね、いつもそれに気がつかないか？ 釣れるか釣れないか、うまくなるかならないか決まってるぢやうんですか…。よし！ 三島は釣つたでえー！

里：それじゃあアニキ…。最後に西湖を振り返つて一言！
江：「お約束」ですか（笑）？ それでは御要望にお応えしまして、やっぱり「西湖は、サイコー！」でしたっ！

里：それでは皆さん、来月の三島湖も「全員集合」！

江：おおよ！
伊：ハイハイ（笑）。
岡：僕も行くぢやあおー！

田：ス、スケジュールがあっ…！
魔法の粉の追い足しという手も、追い足す際の注意点も知っていたが、それは元から入っているケースでの事だった。増やすのは簡単だが、減らすのは難しいエサだと感じていた。しかし、「水分を吸いきつてはマズいなら、吸わないようなエサ作りをする

ればいい」…逆転の発想である。「そんな事は知っているよ」という読者の方も多いのかも知れないが、恥ずかしなからこの日までの僕は知らなかったのだ。不勉強は反省…。

「ロンプスの卵とはまさにこの事だ」と、帰りの車中ではえらく興奮していた。助手席ではチャンプ岡田氏が爆睡していたが、なんとか無事に家に帰れたのはこの興奮のおかげだったのかも知れない。

「伊藤タッチ」は手に入ったも同然。次の三島では必ず結果を出す…。



僕にとって三島湖は、再びへら釣りにのめり込むきっかけとなった思い出の釣り場だ。

もしあの時三島へ行っていなければ、おそらく今の僕はなかった。「へら釣り」は、子供の頃の思い出の中にそつと仕舞われていた事だろう。

ヤマと並び「一度は竿を出してみたい」と、おそらく全国のへらファンが憧れているう房総の準山上市湖群。その代表格が、三島湖だ。

谷川をせき止めて造られたその複雑な姿。四季折々の顔を見せる大自然（ちよつと言いつ過ぎカナ）。野釣りムードは満点である。だが三島湖は、一般的な野釣りとはかけ離れた一面を持つ。圧倒的な「魚影の濃さ」と、張り巡らされた「舟付け用ロープ」がそれだ。このため「三島は野釣りではない」と、一部の人達から敬遠されるケースもあるようだが、抜群のロケーションの中での「激カワ」もまた、面白いものである。ギャップを楽しんでしまえばいいのだ。

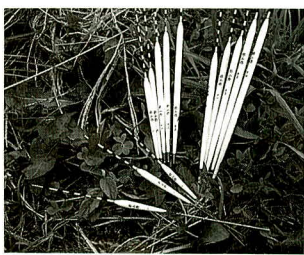
精進に続き、アタリつきりの中での伊藤氏の釣りを勉強出来ると思っていた僕は、動かないウキに面喰らつていた。事前の情報収集をしなかった僕らが悪いのだが、これほど渋い状況とは思ってもしなかったのだ。伊藤氏も「こんなに悪い三島は久しぶりだよ」と、あきれれる程。では、へらはいなかったのか？ 否、へらはいくらでも「いた。舟の下もへらだらけだったのだ。丸見え。

今年の9月は暑かったが、取材当日の4日早朝は、半袖では寒い陽気だった。まだまだ夏気分だった僕

競技派からのんびり派まで、すべての釣り人に使って欲しい…

へら浮子 杉山作

- 浅ダナスタイル
【パートI・パートII・ワイド・ムク】
(各1本4,500円)
- フリースタイル
- 深宙スタイル
(各1本5,000円)



取り扱い店〈五十音順〉
 埼玉・越谷 かわせみ (☎048-969-5067) 茨城・下妻 こやの釣具 (☎0296-44-1619) 東京・渋谷 サンスイ川釣り館 (☎03-3499-5025)
 埼玉・入間 三水堂つ貝店 (☎042-964-2093) 栃木・益子 フィッシングハウスほその (☎0285-72-2215) 神奈川・川崎 崎仙人 (☎044-287-7470)
 東京・吉祥寺 丸勝 (☎0422-22-8923) 東京・青梅 吉川釣具店 (☎0428-22-2467)

が、上着を持っているわけでもない。昔の教科書では「余分に一枚、上着を持っていく」が、野釣りの鉄則であった。失敗…。ダムサイトを吹き抜けた秋の風は、体感温度を確実に下げている。気温と水温はすぐにリンクするわけではないのだが、釣りの心理は自分の体感温度を基準にして動く。

江：伊藤さん、コレ、冷え過ぎですかね？

伊：うーん、低気圧による酸欠じゃないの？(笑)これだけ曇っちゃってるんだしね…

江：あっ…太陽さえ出りや寒くはないですもんね(笑)。

伊：というより暑いでしょ(笑)。

江：いやあオハズカシ…

伊：それに加えてこの風じゃあねえ…。ロープがブルーランで釣りになんないよ(笑)。

江：伊藤さんの「フリースタイル」をもってしてもキビシイですか？

伊：キビシイねえ。だって舟が動いちゃう幅が、竿を送って何とかなるってレベルじゃないよ(笑)。もう少しへの活性が上がるか、風が弱まれば何とかなりそうだけど…。例えなら即、移動だね。

江：でもまあ、みんな並んで釣りが出来るってのはロープならでもですし、船先を給水塔に結わいた岡田君が真剣にNEOへらの試釣してますんで(笑)、ここで頑張らなさいよ。

伊：もちろん！でも見るとホントに渋いんだなあ…。岡田君もあんまり絞らないもんなあ。里ちゃんも浅いタナでセツツなの？それでもアタリ数は多くないんだね…。へらはこんなに見えてるのに。やつぱりへらは生き物なんだねえ…

酸欠による食い渋り。一言で言ってしまうは簡単だが、人間に置き換えて考えたらどうだろう。苦しくて食事どころではない筈だ。水中の溶存酸素量は浅いタナの方が多いため、深田釣りはかなり無理がある。伊藤氏でも克服出来ないへらの生理。どれだけ崇高な理論と技術をもってしても、自然には勝てないのだ。

西湖に続いての渋い状況。しかし西湖と大きく違ったのは、へらの活性がどうしようもない程に低かった事と、大風による舟の揺れがあった事だ。へらの量で言えば明らかに三島の方が多かったのだが、お昼頃の僕は、その時点で伊藤氏と大差ない釣果

であることに気付く、超・低釣果ながらもまたしても満足な気分になりつつあった。西湖での失敗は繰り返してはいない筈、伊藤タッチは何とか真似出来ているつもりだった。が、やはりただの勘違いであつたと気付くのに、その時間はかからなかった。



西湖と全く同じパターンで、事態は劇的に急変した。そう、太陽が顔を出したのだ。その瞬間、エサの周りに「いただけ」のへら達が、一斉に口を使い始めた。というより、襲い掛かってきたといった方が正しいだろうか。

風はいくらかは弱くなったが、ボートの揺れは相変わらずだった。それでもお構いなしで、へらは次々に伊藤氏の竿を曲げた。しかし、僕の竿は曲がらなかった。もちろん、曲げられなかったのだ。

この時僕は何をやっていたか。実は9尺竿を出し、浅いタナを攻めていた。テーマが深田岡田ンゴなので、えっ？と思われる読者もいると思うので書いておくが、直前まではチャカチョーチンをやっていた。何をやっててもバツとしない釣況だった。魚は上にたぐさっているのは分かっていたのだが、魚は上に

チャカチョーチンにしてすぐ、強烈な寄りでエサが持たなくなつた。今思えばこの時点でへらの状態が上向き始めていたのかもしれない。明らかに「へらの活性に仕掛けが負けている」。…そう思った。もっともチャカチョーチンの仕掛けのバランスは、もっともアンバランスなものだが、伊藤氏のエサを勉強する時にやっていた釣りではないと判断。氏に断つて、そのままウキをタナー1m程まで動かしたのだ。

「以前の自分ももっと得意としていたタナで、伊藤氏のエサを学ぶ」。…考えてみれば、エサの組み立て方にタナの違いはない。ならば、自分の釣りとの比較をしやすい浅いタナの方が好都合だ。何より全然釣れない状態からは脱出でき、「格好がつく」そう思った。しかし、甘かった。メロメロの状態のまま、時間だけが過ぎていった。

「カラッソをどこの前の、エサを持たせることが出来ない」。…初心者の頃に帰ったような気分だった。しかし、何もせずボケッとウキを眺めていた

訳ではない。僕なりに考えながら釣っていたつもりだった。伊藤氏のエサに、重いエサが入っていない事は確認済みだったため、魔法の粉の量と水分量の組み合わせは何通りも試した。伊藤氏の釣りとかかけ離れてはいるが、硬めの方向も追つたし、確認のためにナジ幅を出そうとしてみた。ところが何をやってもエサが持たないのだ。

「やっぱエサだけいじっちゃ意味ないしよ…」とエサでの調整を諦めた僕は、仕掛けをいじり出した。当然のようにハリスを詰めていくが、エサが持たないのは変わらなかつた。ハリの号数もひとつふたつ上げてみたが、これもまるでダメだった。

圧倒的なへらの活性の前に、延々とエサを持たせられないでいる自分。やる人がやれば、とんでもない釣果が出るだろう事は、容易に想像出来た。実際に隣では、竿を若干短くはしたものの、深田で伊藤氏がイレイクを演じている。

僕にはフライドなどなかつた筈だが、恥ずかしさと悔しさを涙が出そうになった。例えでもなんでもないのでに脂汗が滲み出し、頭の中が真っ白になっていく。「落ち着け」。きりぎりの集中力で、必死に自分に言い聞かせる。次に考えられる事は、ウキのサイズアップしかない。しかし益々「伊藤氏の釣り」ではなくなってしまう。…と、ここでタオル。

「エサが持たないよ！」おそろく4回の取材の中で、たった一度の厳しい口調だったと思う。優しい伊藤氏は、僕を気遣ってなかなか言い出せないでいたのだろう。見るに見兼ねての檄だったのだ。

アツくなつていった僕は、「そんな事は分かっているよ！でも出来ないんだ！」と一瞬思った。しかしその一言は、完全に自分を見失っていた僕にとって、冷静さを取り戻すいいきっかけになったのは間違いない。「釣れていないのはもうバシっているんだ。格好つけたって始まらない」。何より、舟から落ちそうなほど身を乗り出して竿を送っていた自分のプザマゼに気が付いた。「いくら竿を送って、持たないエサは持たないよなあ」。それからしばらく、僕は氏の釣りを眺めていた。



伊藤氏の釣りをボンヤリと眺めていた僕は、ある事に気が付いた。それは、深田と浅タナという違いはあったものの、ハリスの長さがまるで違うという事だった。劇的に活性が上がった釣況に「追わせる」必要などない筈だったが、氏のハリスは長かった。70-80cmくらいだろうか。「不思議だ…。あれで何でエサが持ったんだろう？」。第一印象はそうだった。しかし、「ハリスを伸ばす事でエサが入っていくようになる」のは、近代へら鮒釣りの基本ではなかつたか？しかも自分でも、「中途半端な詰め具合が一番ダメ。かえってピンポン」と書いたではないか！僕は一気に目が覚める思いがした。「ここにかくハリスを伸ばさねば」。

ハリスを結びながら不安もあった。「これで結果が出なかつたら行き止まりだ」。もちろんそれまでに極端に短いハリスも試してはいたが、交換直前の僕のハリスは25-32cmで、長いとは言えないが非常識な短さではなかつたと思う。事実「小ウキ、短ハリス」は、多くのアングラーによって検証を終えたセオリーだ。小ウキでの「振り切り」によって作られる「オモリを支点としたV字角の小ささ」は、早い段階からハリスが張る事を意味する。すなわちそれは「アタリが出る位置(ヒットゾーン)」の拡大につながる。好き嫌いが分かれるところだが、その小ウキが「足長」のウキであれば、立ち始めるタイミングも早いから(ナメ立ちの状態も含め)、広くかつたヒットゾーンを捕らえる事が可能になる。そしてそれを活かし切る「短ハリス」。この日の僕はエサを氣遣つて「落とし込み」を選択していたが、ハリスの張りが早い短ハリスのメリットは十分に発揮されると考えた。エサが持たないという事は、早い段階で食い頃になってしまっていると考えられるから、少しでも早くハリスが張れば、アタリとして見る事が出来るのではないかと、これは間違っていないだろう。しかしこの日の三島には通用しなかつた。

思い切つて50-60cmまで一気に伸ばした。ちやうど倍。すると、それまでがウンのように僕のウキはアタリ出した。振り込んでウキが立ち、肩で「クーッ」と受ける。ハラハラしながら竿を送る。当然そ

れでもナジミなんか出やしない。「やっぱりダメかあ...」そう思った。しかしここから見事にウキが消し込まれるようになった。まだ「受け」を見切ることが出来ない僕にとっては、アタって初めてエサが持っていたと証明されるのだ。しかもカラブリがほとんどない...つまりハリスは常に探まれている状態。食った時だけハリスが張るとい状態だったのだ。アタリは「消し込み」がほとんどと大きかったが、これはハリスが張っていた証と捉えるのではなく、活性の高さから見ると、食って走ったアタリと捉える方が自然だと思った。(どうでもいい事だが、こういう場合において「カラツン」という言葉は少し違う気がした。「カラツン」というよりも「カラブリ」なのだ。僕にとって「ツン」にはハリスが張っている状態からのアタリというイメージがあるからだろうか)

イレバクの中はずっと考えながら釣っていた。ここまでハリスを伸ばさなければ、ハリスが弛まなかったのではないかと。上下のハリスが互いに引っ張られ合う事で、エサがハリ抜けしてしまうとしたら、何のための「ハリスの張り」なのか分からなくなってしまう。ならば、ハリスは食った時だけ張ればいい。これが伊藤氏の釣りなのではないか?...というより、そこまでしてやらないと持たない「デリケートなエサ」だからこそ、可能な釣りなのではないか?...実はこれに近い事はすでに原稿に書いてあったが、三回目の取材にして僕は初めて実感出来た事になる。「いいエサが先にありき」なのだ。「持つか持たないか」という「いいエサ」での究極の理想は、食って初めてハリスが張ることからの「受けていて「発取り」であり、しかも「カラブリがない」ことなのだ」と理解した。これを真正オートマチックだ。「アタってアタってドカン」でもオートマチックは成立するが、「持つか持たないか」というエサでは不可能だし、そこまでアタリ返しとして見るためのハリスの張りも求めない。求めたら成立しない。それが伊藤氏の釣りののだ。

では「小ウキ、短ハリス」は間違いなのか? そんな事はない。水槽実験ならば、オモリによる引っ張り抵抗を除き、アマイエサをもっとも確実にタナまで届ける手段である事には間違いないだろう。ではなぜ、この日の三島では効かなかったのか? それは、落下中の「へらのモミ」が強烈すぎたという事ではないだろうか?...へら釣りは水槽でやるも

のではない。釣り場でやるものなのだ。

延々と釣れずにもがいていた時、おそらく僕の狙い通りに(笑)ハリスは水中で「張って」いたのだ。正確にはへらのアオリで「張らされて」いたのだが、一度もナジミは出なかったわけだから、イメージとしては「2本のハリスがオモリを中心として水平方向に一直線」という感じだろうか。思い出ししてみると、竿を上げたら両バリともなかつたことが一回あった。

僕は釣りには方程式があると考えている。この言葉はへら釣りではよく使われるが、数式で表せば「X$\times Y$」というアレである。Oは、+でも-でも+でもXでもいい。釣り人個々の料理法があるだろう。X、Y、Zは変数で、固定ではない。可変なのだ。だから「正解はひとつではない」。もっとも釣りの場合は自然が相手であり、厳密に言えば数式で表すこと自体、無理があるのだが。

釣りを組み立てる要素は様々あるが、ここでは「Xをウキ、Yをハリス、Zをエサ」だと仮定して話を進めてみたい。三島では、伊藤氏のエサのタッチを追求するというテーマのためには決まってしまう。Xのウキについては、伊藤氏曰く「小ウキがキモではない」ものの、やはり僕の場合は「小ウキがキモのウキ」ということで、コレも決定。となると、あとはだけ考えればよかった。本物の数字であればもう、Xを求めるための材料は出揃った事になる。釣りの場合なら、ある基準点からの増減で探っていけば、正解もしくは正解のある方向を導ける筈だった。しかし、この日の僕には解けなかった...

僕はある重大なミスをしてた。「有り得ない」領域の中でどんなに探ってみても、正解へのヒントは見えてこないのだ。「ない」すなわち「ゼロ」。僕はゼロで割ってしまった。数式が成立する筈がなかったのだ。

タラタラと書いてきたが、一言で言えば「小ウキで長ハリス」という正解。たったこれだけの事に気づけないとは間抜けだが、「なぜ気づけなかったのか?」。帰り道、またしても爆睡していやだった岡田氏の隣で、僕はずっと考えていた。ハリスを引っ張り、エサ抜けさせてしまう要素については、「オモリ」も「ハリス同士」も両方知っていた筈だった。にも関わらずたどり着けなかった領域...。やはり、「伊藤タッチ」と「想像以上のへらのモミ」に惑わされたとしか言えない。僕は改めてへら釣りの奥深

さに感動を覚えた。

お父上が迎えに見えた伊藤氏とは、湖上で別れていた。夕暮れまで延々と続いた僕のイレバクを見せる事は出来なかった。次回の羽生では、何としても氏を喜ばせたい...

好き嫌いは済まない部分もあるので補正しておきます。足の短い(全長も短い)小ウキの方が、立ちはクイックです。トップが水面から離れるタイミングは、同じオモリ負荷なら一般的には足長の方が早いと言えそうです(この辺は、11月号「Deep Side Angel」でも言及されています)。一見、足長の方がメリットがあるように感じますが、12月号の「アタるウキ? とまるウキ?」を思い出してみてもいい。少し話が違うと思われるかも知れませんが、ウキが動いている状態と、止まっている状態という違いについては同じ話ではないでしょうか? では、へらを凝縮出来るのはどちらのタイプでしょうか?...ここで、「足長だから」という、早い段階でのアタリは送れば済む話では? と感じる方がいるかも知れません。その通りです。逆に言えば、無理して使う必要もない訳です。「受け」を重要視するケースでは、足長にこだわる必要はないという事なので。もっと言えば、立ち始めるタイミングが早いウキは、入り込みのスピードも速い傾向があります。

最後の取材は羽生吉沼だった。結果は12月号の「オマケ」の通り。この結果で、伊藤氏の釣りを完全に理解し、盗んだなどと宣言するつもりはない。そのために小見出しを「期末テスト」にしたのだ。間違っても「卒業試験」などと言うつもりはない。しかし正直に言えば、かなりの満足感が残っている。この4回の「講習」は、確実に僕の身になったからだ。何より、伊藤氏に12月号までの原稿を読んで喜んでもらった事が、一番嬉しい。

帰り際、「来年も一緒に釣りをしましょう」と約束した。今後もし心優しき氏との付き合いは続く。これからどんどん字でいこうつもりだ。

【伊藤洋一の常識】完

期末テスト。

たぶん、4回の取材を通じて、江成の一番のお気に入りであろう写真がコレ(自分のパソコンの壁紙にしているとか)。西湖での釣り終了後、青木ヶ原ドライブインのおかみさんに撮って頂いた写真だ。左から、岡田、伊藤、里、田辺、江成。全てのしからみを越えて集った「へらキチ達」。素晴らしい日だった!



これで、「伊藤洋一の常識」は終了です。しかし、「岡ダン」「とうもろこし」を完全にマスターしてしまつたなどは、江成はもちろん、伊藤氏でさえ思っていないことでしょう。奥深きへら鮒釣りの中でも、もっとも深いテーマなのだから...。これからも、江成の試行錯誤は続いていくはず。しかし、この素晴らしい「伊藤洋一の常識」を通過することで、江成はもちろん、読者の方も何かを掴んだはずだと確信している次第だ。

さて、来月からは何をやるだろうか...。江成&里は、遠方に暮れるのである...

by 里ちん

へら鮎釣りの楽しさを追究し続ける...

へら鮎

Monthly fishing magazine herabuna

No.457
2004 Jan

1

新企画

- 生井澤 聡&山中いつ子の
佐原水郷の四季
- 原始釣人・稲毛利夫&貧果釣人・モロちゃんの
純野池探求記!
アタリをちょーだい!!
- 素敵な釣り人を紹介します。
好きです! へら鮎釣り!
- 天野正由的篋鮎釣行記
そんなモジリに
ダメされて...
- トーナメント小林恭之が挑む!
竿頭までぶっ飛ばせ!!
- 竹竿&合成竿で野釣りを楽しむ!
オデコバンザイ!?
- 編集部厳選の最新情報をお届け!
今月の要チェックフィールド

岡田清、
G杯獲る。

特集

佐原向地 PARTIII

横利根川

北城 錦

特集II

マルキュークラブ対抗選手権
四連覇達成緊急対談。

フォーラム 最強の秘密を 解き明かせ!!

田中雅司 糸井日出男 岡野正基
岡田 清



岡田清
Deep Side Angle

【G杯争奪全日本へらブナ釣り選手権】

へら鮎
No.457

【最終戦 神流湖】

まだか?まだか?の
リクエストにお応えして...

ちからだま

「カ玉」

この冬も

マルキューです!



発売中!



手間のいらぬ粒状くわせ! 便利なうえに、よく釣れる!

昨年いきなり登場し、便利で釣れると評判になった、冬限定「カ玉」。今年も、いよいよ発売になりました。わらびウドンタイプの粒状くわせエサで、ピンから取り出し、ハリに刺すだけでOK。使いたいとき、すぐに使えます。ベトつかず、ハリ付けが簡単だから、素早い手返しが可能。浅ダナ、チョーチン、段差の底釣り、オールラウンドに活躍します。

● **カ玉 ¥400** 3月出荷分までの限定発売!

つれるエサづくり一筋
丸マルキュー

本社・桶川工場 埼玉県桶川市赤堀2-4 〒363-8509
TEL: (048) 728-0909(代) FAX: (048) 728-3909
大阪支店 大阪府寝屋川市楠根南町12-14 〒572-0811
TEL: (072) 824-0909(代) FAX: (072) 825-0909

四国営業所 香川県坂出市西大浜北3-4-33 〒762-0053
TEL: (0877) 44-0909(代) FAX: (0877) 44-3909
九州営業所 佐賀県鳥栖市姫方町341-8 〒841-0023
TEL: (0942) 82-0909(代) FAX: (0942) 83-0909

マルキュー・ホームページ
<http://www.marukyu.com/>
<http://www.marukyu.com/i>

昭和41年5月4日第3種郵便物認可
平成16年1月1日発行

定価 1000円 本体九五二円

